



部会の窓 遠野市史叢書発刊のための編集作業を行っています

12月10日(木)と23日(水)、市史叢書^{そうしよ}発刊のための内容検討会を開催しました。

市史叢書とは、市史編さん事業により調査が進んだ資料の中でも研究の参考となる資料を、通史編・資料編に先駆けて書籍化したもので、これまでに『遠野南部家御用留書 天保年間』が刊行されています。現在はこの続刊にあたる『遠野南部家御用留書 嘉永年間(上)』の編集が進められており、近世部会^{かなひらけんじ}の兼平賢治部会長が監修にあたっています。遠野南部家御用留書は、天保3年(1832)から明治2年(1869)にかけて遠野南部家の盛岡屋敷において記録された公用日誌で、全32冊が伝えられており、調査研究員ら6名が^{ほんこく}翻刻を行っています。

検討会はオンラインで行われ、兼平部会長と調査研究員らが訂正すべき箇所をひとつひとつ丁寧に確認していました。『遠野南部家御用留書 嘉永年間(上)』は、今年3月に発刊の予定です。



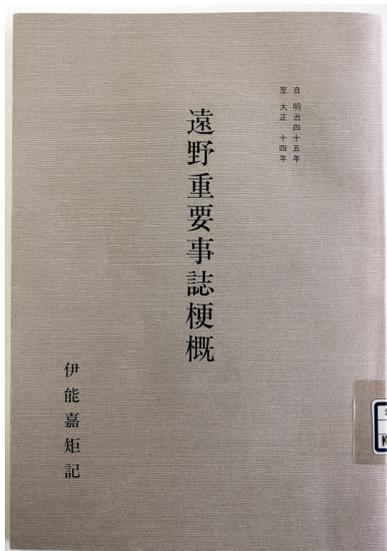
▲検討会の様子。兼平部会長は県外からオンラインで参加。



▲遠野南部家御用留書 (遠野南部家蔵)



資料紹介 『遠野重要事誌梗概』にみる疫病の記録



『遠野重要事誌梗概』▶
(遠野市立図書館蔵)
郷土資料室で閲覧することができます。

用語解説

* 梗概…こうがい。

大略、あらすじ、あらまし。

* 猖獗…しょうけつ。

悪い物事が蔓延^{はびこ}り、勢いを増すこと。

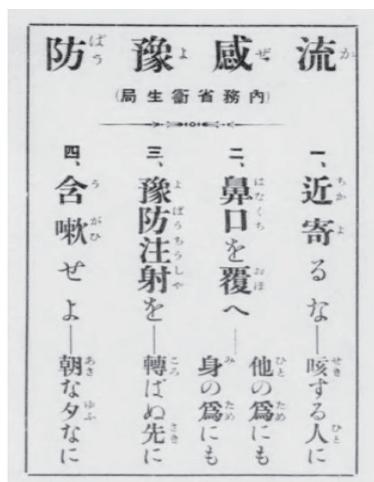
『遠野重要事誌梗概*』は伊能嘉矩^{いののかのり}によって記された明治45年(1912)から大正14年(1925)までの記録で、様々な行事や、初雪、火事、災害などが記録されています。その中から、今回は疫病^{えきびょう}に関する記録をご紹介します。

同資料に記録されている疫病は大きく分けて、チフス、流行性感冒^{りゅうこうせいかんぼう}(インフルエンザ、いわゆるスペインかぜ)、風邪の3つでした。特に、現在新型コロナウイルス感染症が全世界的に猛威を振るっている中で、約100年前に流行したスペインかぜが改めて注目され、ニュース等で目にした方も多いのではないのでしょうか。

スペインかぜはヒトにおけるA型インフルエンザウイルスによるもので、大正7年(1918)から大正9年(1920)にかけて流行し、全世界で患者数約6億人、2,000万から4,000万人が死亡したとされています。(裏面に続く→)

日本でも大正7年(1918)8月下旬から流行が始まり、11月には全国的な大流行となりました。『岩手県史』によれば、岩手県でも大正7年11月頃から患者が発生、罹病者は33万人以上、うち死亡者は3,660余名となり、同8年(1919)、9年(1920)と各年2,000人近い死亡者を出したと記録されています。大正7年11月16日には、「同日流行性感冒猖獗*死者続出、各学校欠席生徒児童激増、臨時休校多し、本日予防に関し告諭を発する」状況でした。

『遠野重要事誌梗概』には、遠野でも11月になると遠野町での感染が大きくなったため、小中学校が12日間休校になったと記されており、当時の様子が見える貴重な記録です。



◀大正9年1月19日、内務省衛生局(厚生労働省の前身)が各府県に配布した、予防のための標語が記された小札。48万枚が配布された。(出典:『流行性感冒』内務省衛生局 1922、国立国会図書館デジタルコレクションより転載)



お染、久松は江戸時代に道ならぬ恋の果てに心中したとされる男女で、この事件をもとに歌舞伎や浄瑠璃の演目が作られ有名になりました。

また興味深いのは、翌8年(1919)の8月から流行した風邪は八百屋お七の霊の仕業とする風聞により、盛岡や遠野では「うちに吉さんはいません」という貼り紙をした、という記録です。八百屋お七は、江戸本郷の八百屋の娘で、天和2年(1682)12月28日の火事の際、逃げた先の寺で知り合った寺小姓の吉三郎と恋仲になり、火事になれば再会できると思い放火したため処刑されたとされる女性です。「ここに吉三郎はいませんので来ないでください」というお七よけの貼り紙をすることで、風邪がうつることのないようおまじないをしたのでしょ

う。実は明治23年(1890)に全世界的にインフルエンザが流行した際、日本ではその感染力の高さから「お染風」と呼ばれて恐れられ、予防のために「久松留守」という貼り紙をしたことが知られており、これに倣ったものと考えられます。インフルエンザという名前が知られるまでは、前述のお染風のように、「〇〇風」といった世事にちなんだ名前がつけられました。ワクチンや特効薬がなく医療体制が整っていなかった当時、私たちが感じる以上に恐ろしい病気だったことは想像に難くありません。なお、スペインかぜ流行当時には「人が集まる所に行かない」「マスク」「うがい」などが予防手段として推奨されていました。現代と変わらない予防法が確立されていたのですね。

【参考文献】『岩手県史 第10巻 近代篇 5』岩手県 1965、『岩手県史 第12巻 年表』岩手県 1966、『流行性感冒』内務省衛生局 1922、「日本におけるスペインかぜの精密分析」東京都健康安全研究センター 2005 ほか

<p>大正二年 八月十日 高橋遠野町長は衛発第一六一号を以て衛生上の注意を發し腸チフス赤痢パラチフス豫防心得を頒布す</p>	<p>大正六年 本年七八月の頃より町内腸チフス流行し患者頗る夥しく隔離所爲めに空室なきに至り而して同病のため死没せる者亦頗る多数に上りたりき</p>	<p>大正七年 十月の頃より一種の流行性感冒(所謂西班牙風)猛威を全国に逞くし延きて本縣に及び十一月に入りて遠野町甚だしく六日より一週間次で五日間追加中小學校共に臨時休業す</p>	<p>大正八年 八月に入り一種の風邪流行す本年は八百屋お七の七百年忌に相当するより其霊のたどる所此病に感ずと言ひ觸らし遠野の町家には「此内に吉さんは居りませぬ」と書せし紙片を倒に張れる(戸外に)を見受く盛岡辺にては「お七来たかや吉さんは居らぬ」と書したるを貼り出せしとぞ</p>	<p>大正九年 (三月) 四日より四日間流行感冒のため小學校臨時休止となる</p> <p>『遠野重要事誌梗概』より疫病に関する記録を抜粋</p>
--	--	--	---	--